

Title	恩師大出晃 (大江晃) 先生の思い出
Sub Title	A memoir of my teacher, Professor Akira Ôide (Akira Ohe)
Author	岡田, 光弘(Okada, Mitsuhiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.146 (2021. 3) ,p.15- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：岡田光弘教授 退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000146-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

恩師大出晁（大江晁）先生の思い出

岡田 光弘

今回三田哲学会編「哲学」で私の退職記念号を企画していただいたのは私にとって本当にサプライズでした。全く予想していなかったことでした。この退職記念号を企画いただいた慶應義塾大学文学部哲学専攻の同僚の方たちに感謝したいと思います。

私は論理学者と言われていますが、実は論理学分野で自信を持つ業績があるわけではなく、論理学について自信を持っていることは何かと問われたとしたら、しいて挙げるとすると、「論理とは何か」についてもしかすると世界で一番分からなくなっているといえるかもしれないことです。特にはっきりした業績を上げてはいないものの、いろいろな領域を横断して論理を研究してきた中で、論理とは何かということがどんどん分からなくなってきました。100 点満点で論理の理解度を比べるとしたとき、新生児の論理に対する理解度が 0 点だとすると、私はマイナス 100 点の自信があり、マイナス度（論理とは何かについて分からなさ）は新生児も含めて誰にも勝るような一定の自信のようなものがあります。

しかしながら、分からないながらも、論理の哲学を中核として学際的に論理を研究してくることができたことは幸運でした。この道に導いてくださった恩師を何人か挙げることができます。近年、竹内外史先生について寄稿する機会がありました。この機会に私にとって論理への最も決定的な路線を敷いていただいた、私の最大の恩師である大出晁先生について語らないではいられません。

大出先生に初めてお会いしたのは、私が東京大学の本郷キャンパス哲学専攻の学部学生の時でした。大出先生は論理学の講師として慶應義塾大学哲学科から出向されていたらしいです。私はとても幸運だったと思います。大出先生はそれぞれの回の講義のための講義ノートを作っておら

れ、とても丁寧な準備がされていて、大変勉強になりました。ただ、それだけではありませんでした。初回の講義が終わった時以来、常にこやかに学部学生履修者である武笠さんと私に対応してくださいました。初回の講義後に質問するやいなや、議論の続きを本郷通りの向かい側の鳥屋さん連れて行ってくださいました。毎回ほとんど必ずそのお店で、講義時間を上回る時間を私と武笠さんの質問に詳しく答えていただき、またいろいろなお話をしてくださいました。いつもにこにこして話されていました。（後になって、慶應義塾大学ではしばしば怖い先生と考えられていたのを知って、とても驚きました。）授業中のとてもまじめで几帳面に講義ノートを板書しておられる態度から、鳥屋さんでの講義第二部のにこにこして笑い声が絶えない態度に変わられるのはとても印象的でした。学術的に高度で、同時に教養に富んだお話でした。（いつも夕食をご用意されていた奥様から、東大での授業の後、夕食がいるのかいらないのかどうかもってはっきりさせてほしい、と言われたとあるとき言っておられました。それ以降、ほぼ毎回、東大講義後は夕食不要と予告されたようでした。）

私が学術の道に進むのにかなり絶望的に感じているとき、力強く激励してくださったのも大出先生でした。今日まで私が学問を続けてこられたのは大出先生のおかげです。

博士課程に進学するまで私は海外に出ることは全く考えていませんでした。学会参加などの国内旅行でも、まったく飛行機に乗ったことはなく、自分は一生飛行機に乗ることはないだろうと修士課程の終わりまで私は考えていました。博士課程進学のための面接は30秒くらいで終了しましたが、その30秒間に博士課程進学条件を大出先生から課せられ驚きました。海外に出てみなさいというアドバイス（命令!）でした。それを契機に海外での勉強や研究のことを真剣に考えることになりました。（最初の海外滞在はニューヨーク市マンハッタンで石黒ひで先生のお家に1か月弱訪問・滞在したのですが、この話を始めると長くなるので、ここでは

省略します。) 学部時代・大学院時代に論理学及び論理の哲学の研究へ導いてくださったのも、その後海外活動の方向へ導いてくださったのも大出先生でした。

三田キャンパスでは、大出先生は授業日を週一日に限って午前から夕方まで授業をされました。私は午前中にゼミ形式でデカルトなどの原典授業を受け、午後に論理に関する授業・研究会を受けていたと思います。夕方の論理学研究会は西脇与作先生も指導に加われ、多くの院生が集まり、この日のクライマックスでした。論理学や集合論の本を読み進めるスタイルで、分担部分を担当者が発表し皆で議論しました。二人の論理学指導者の下でとても熱気に包まれた議論が進められました。自由な雰囲気でも議論できる環境であり、同時に真剣さも緊張感もありました。その夕方の授業後、皆が大出先生の研究室に集まって懇談しました。三田キャンパス研究棟のあの狭い教員用個室に、毎週 15 人近くが(最後の晩餐形式で着席)先生と懇談していました。

大出先生の専門諸分野について、もし今もご健在であられたら大出先生にお尋ねしてご教示いただきたいと思うことが最近になってもよくあります。昔は自分では見落としていたことで、つい最近その話題の重要性に気づき、精通しておられた大出先生の偉大さに改めて気づくことがよくあります。(実はお聞きしておけばよかったと思うことが昨日もありました。)

大出先生が不機嫌な顔をされて周りをとても震え上がらせる、という話を後になって聞くことがありましたが、上に書いたように私は大出先生の上機嫌のお顔ばかりを見ていたような気がします。私に関することでご苦労をおかけしてばかりいたはずなのに全くそのようなことを口にお出しにならず、私はのびのび自由にさせて頂いていました。私に見えないところでずいぶん苦労や心配をおかけしたはずです。(他の先生方からは怒られたことは多いです。)

それでも、不機嫌そうなお顔をほんの数回、瞬間的にだけ目にしたこと

があります。例えば、哲学専攻・倫理学専攻出身の他大学研究者や哲学専攻・倫理学専攻大学院生なども参加する研究発表例会を毎年秋に「三田哲学会例会」という名称で開催していて、その準備の話が先生からあったとき、大学院生の私は出しゃばって、「例会の名前が三田哲学会例会となっていますが、正式には三田哲学会哲学・倫理学部門例会ではないでしょうか」というように（いつものように、思っていることをそのまま）発言しました。その時の一瞬の不機嫌そうなお顔をよく覚えています。私にとってはとても長く感じた 10 秒間くらいの沈黙でした。そのあと、「じゃ、MIPS 例会としよう」と一言。（それ以来、例会はいまも MIPS と呼ばれています。）すぐにいつもの上機嫌のお顔に戻られました。この命名のように、必要に迫られると（不機嫌そうな一瞬の沈黙はあっても）とっさ的に的確なアイデアをお出しになる先生でした。

威厳のある、人望のある、教養のある先生でした。私も三田の哲学専攻の教員を務めましたが、私にはとてもできないことばかりでした。学問の道に導いてくださった大出先生に対して感謝の気持ちをここに留めさせていただきます。また、大出先生を生んだ哲学専攻の伝統を改めて素晴らしく思います。戦前すでに哲学専攻の松本正夫先生らが主導して、若き大出先生も参加し、Hilbert-Ackermann の世界最新の論理学教科書を輪読し始めたというエピソードもお聞きしたことがあります。

私自身についていえば、学界や慶應義塾への貢献はとても小さいものですが、もしなにかの貢献があったとすると、それは大出先生をはじめとする慶應義塾の先生方や、私が教員に加わってからの同僚および学生たちの力によるものだと思います。大出先生の後に私が務めた教員時代の多くの論理学や論理の哲学の活動は、学部学生、大学院生、ポスドク若手研究者、同僚教員らからの刺激やそれらの人たちとの共同作業によるところが大きかったです。優秀な学生や若手研究者や同僚に恵まれたことも、師に恵まれたことと同様に幸運であったと思います。